

理科部門

総評

全体的に質が高く、長期間掛けて研究を続けた努力の跡がうかがえる力作ぞろいでした。根気よく観察したことで生き物の営みを学んだり、またその価値についても、環境と結びつけて考えていこうとする姿が作品から垣間見ることができました。

しかしその一方で、「作るおもちゃ」や「工夫する日用品」といった、試行錯誤を繰り返して、工夫を凝らしていく「物作り・物理化学の分野」が少なくなっていたのが残念でした。

もっと日常生活のふとした疑問や小さな問題に目を向けて、化学的検証活動を追及していく姿勢を、これから期待したいところです。

子どもの文化・教育研究所 理事長賞

ヤマトジミの飼育(上)(下)

東京都 白百合学園小学校 6年

阿部 彩織



文部科学大臣奨励賞
全国中学校理科教育研究会 会長賞
茅ヶ崎のキノコの今Ⅲ

神奈川県 茅ヶ崎市立第二中学校 3年
稲垣 匠

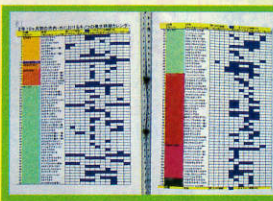


3年間にもわたりキノコへの関心を抱き続け、膨大な量の情報を収集しています。根気のいる現地調査を重ね、つひとついでにキノコを採集・分析し、また写真の記録を残したりと地道にテーマに取り組んでいるひたむきな姿勢に、大変感心させられます。

また、収集したデータの整理として、それぞれ分類しながらカレンダーを作ったり、グラフを作成したりとまとめ、いづる発生するものなのか非常にわかりやすく仕上げています。採集し



下校時にキノコを探す稲垣くん



お役立ち!!キノコカレンダー



400種にも及ぶキノコのデータは圧巻です

た場所を細かく記した自作の地図にも、努力の跡がうかがわれます。研究の動機として述べられているように「茅ヶ崎の自然史」として十分に役立つこととしてよ。生長記録に及んでは、1時間で完全な形に生長するものから数日かかるものまで、写真を使って記録し、見えたえのある資料として強いインパクトを与えてくれます。400にも及ぶキノコの採集結果は、キノコ図鑑にも匹敵するような力作となっているだけでなく、環境問題に目を向ける必要性を感じさせる点でも評価されました。

ヤマトジミの飼育に失敗したことがきっかけになり、そこからさらに飼育の方法を研究し、「卵」→「さなぎ」→「羽化」→「寄生バエ」と、つひとつひのことに対していねいに取り組んで研究しています。

途中、大・中・小の幼虫が餌としているカタバミの葉の食べ方の違いに興味を持ち、さらに奥深く調べているところがいいますね。また、天敵の寄生バエの発見のようすや、飼育の難しさもよく描かれています。

昨年の「文部科学大臣奨励賞」のオオバコの研究から、また段と研究の進め方がしかり身についてきています。落ち着いた手順で、研究を進めているという印象を受けました。そして何より、自分の力で楽しんで観察・飼育をしている姿が記録に大変よく表れている作品です。



優しいタッチの表紙から、彩織さんのヤマトジミへの愛情がうかがえます



1日2回、きちんと観察しています

日本初等理科教育研究会 理事長賞
モンシロチョウとあはちようちようになるまで

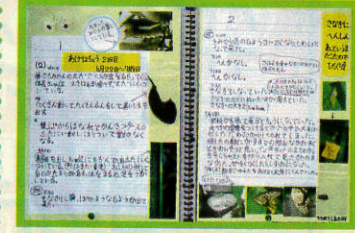
千葉県 我孫子市立我孫子第一小学校 3年
落合 美希



この作品は何より観察がていねいで、記録のスケッチがしっかりと描かれています。また、スケッチだけでなく写真も上手に活用し、正確な観察がなされています。研究のねらいに対する視点が明確で、餌の葉のどんな部分を好んで食べるかを見るなど、細やかな配慮がうかがえます。

100匹ほどいたモンシロチョウの幼虫が、たった一匹しかチョウにならなかったという事実から、「チョウになるのは、大変なことなんだ」と

発見し、生命の尊さを実感しています。



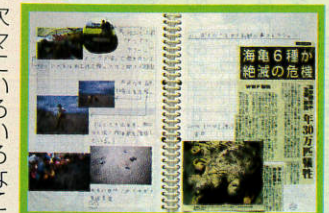
フンや切れた羽まできちんと添付してあります

全国小学校理科研究協議会 会長賞
僕のウミガメ研究 カメとともに歩んだ3年

宮崎県 高鍋町立高鍋東小学校 6年
戸高 耀介



「このことを長く、また粘り強く取り組んだ心意気の感じられる大作です。冒頭に述べられた「なぜ『アオウミガメ』なのか?」大好きだからとか言いようがない。」という言葉からは、この作品に対する愛情と力強さを感じられます。



毎年海岸を清掃している戸高くん。本当にウミガメが大好きなんだね

また、ウミガメに対する関心の高まりから、次々にいろいろなことが見えてきて、ウミガメの生態についての研究が深まっていくプロセスがとてもよく描かれています。環境問題とも関連し、価値のある研究に仕上がっています。



紺碧の海と白い砂浜が目に見えるような表紙です

中央出版株式会社 社長賞
水生昆虫の研究

岐阜県 美濃加茂市立山手小学校 6年
大脇 渉

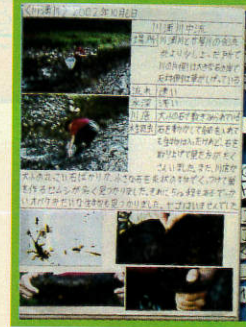


研究の基本である「採集」「観察」「調査」「まとめ」という一連の活動が、実にていねいに進められています。おろそかになりがちな、こうした地道な取り組みは、研究を進めていく上ではとても大切なことです。また、種類によって分けられた標本は、すばらしく、目を見張るものがあります。



ホルマリン液で保存された標本。まるで生きているみたい

今後は、さらに焦点を絞って研究をし、本で調べたことと自分で観察した結果とを照らし合わせながらまとめいくとより良いでしょう。



昨年の経験を活かして、水生昆虫の多い川でいざ採集!

優秀賞

【オニヤンマの研究(2003)】
東京都 白百合学園小学校 5年
堀江 琴音

【汚染土壌の植物への影響】
東京都 筑波大学附属小学校 4年
仁熊 健太

【蠶を飛ばす日】
東京都 東京学芸大学教育学部附属小金井小学校 5年
高橋 邑和

【メダカの観察(5年目)】
神奈川県 茅ヶ崎市立梅田小学校 5年
末田 有加

【川辺に植物が繁殖しやすい理由を考察する(Part5)】
千葉県 市川市立東国分中学校 3年
神 美幸